

マナー 2007年7.8月号 Topic

ベートーヴェンのチェロ・ソナタ 新版演奏に取り組んだ小澤洋介

取材・文/加藤智子
写真/編集部
写真提供/小澤洋介



澤の入魂の演奏にレーベンスクロフトの端正な音がこたえる
© 山村清波

この5月、東京文化会館にてベートーヴェンのチェロ・ソナタ全5曲の全曲演奏を果たした。20数年來のパートナー、ピアニストのティム・レーベンスクロフトとのぞんだ4度目の全曲演奏は、過去の演奏からさらに一歩発展した意義深いものだった。「ベートーヴェンのチェロ・ソナタの成立を追ってみると、1796年に作曲された第1番、第2番は、当時売り出し中だったベートーヴェンが、プロシア王の御前で演奏した作品。自分の力を最大限にアピールしようという若々しさにあふれた作品ですね。続く第3番は交響曲の「運命」、「田園」とほぼ同時期、つまり彼の黄金期に書かれた傑作。そして第4番と第5番は1815年、人生の後期の門口で書かれた。つまり、チェロ・ソナタ全曲を追うことは、ベートーヴェン

の作曲家人生をたどることもである。第5番がいとも美しいフーガで締めくくられることにも、5曲を通して演奏する意義を強く感じます」
今回、8年ぶりに全曲演奏に取り組んだのは理由があった。2004年にベレンライター社が出版した新版の楽譜との出会いだ。

「ロンドンのレーベンスクロフトから『知っているか?』と新版の存在を聞かされ、急ぎ購入したのが05年。それを手にしてまず驚いたのは、校訂者のジョン・サン・デル・マール氏による注釈が67ページもの冊子としてつけられていたことです。英語のテキストは読みくだすのに難儀しましたが、それは、現存するベートーヴェンの自筆譜から銅版による初版本、さらに、ブライイトコプロフ版やペーターズ版、これまでのスタンダードともいえるヘンレ版など、それぞれの楽譜上の違いを徹底的に検証し、その仔細をすべて記したものでした。その徹底検証を通し、ベートーヴェンが意図したものに

により近づこうと試みたわけですね。新版での大きな変更点の一つが、第3番の第一楽章、第四楽章の冒頭拍子記号。これまで二分の二拍子で記されていたのが、新版では四分の四拍子と変更されました。二拍子が四拍子でも鳴る音にまったく変わりはないものの、弾く方の気持ちは断然変わった

てくる。結果的に聴こえてくる音楽も違ってくるというわけです。その他、スラーの長さやピアノのペダルのタイミングといった細かい変更点は、おびただしい数にのぼります。ピアノとチェロで、フォルテの位置をわざとズラしている箇所もあります。交響曲を書いた人だけに、パート間に「ズレ」を作ること、より立体的な音楽を創ろうとしていたようです。読むだけで、彼の音に対する細かな配慮とこだわり、その人柄さえも浮かび上がってくる資料といえますね」

演奏会に居合わせた多くの人にとつては、チェロ・ソナタを介し、作曲家の実像に迫る絶好の機会となった。



チェロ・ソナタ第3番作品69の第一楽章。長く二分の二拍子とされていたが、新版では四分の四拍子に変更された



チェロ・ソナタのさまざまな版。ペーターズ版(左)、ヘンレ版(中)と、2004年に出版されたベレンライター版(右)

クライネス・コンツェルトハウス Op.23
初登場! 小澤洋介、三戸素子率いる室内オーケストラの夕べ
7月15日(日) 19:00 東京文化会館小ホール
ヤナーチェク 弦楽オーケストラのための組曲ト短調、J.S.バッハ フア
ンタイン協奏曲ト短調、トヴォルサーク 弦楽セレナーデホ長調

Concert Reviews

音楽の友 2007年8月号



●小澤洋介 vc
チェリストにとってベートーヴェンの「チェロ・ソナタ」はバイブル的な存在といえるだろう。それを一回の演奏会で全曲演奏するというのは、誰しも一度は試みたい企画に違いない。

しかも今回の演奏会では、2004年にベレンライターから出版された改訂版による全曲演奏という話題性が目を引く。小澤はすでに98年と99年にヘンレ版による全曲演奏も行っているから、これはひとりの演奏家が成し得た「快挙」といってもいい。

この改訂版では強弱記号の位置やスラーのかけ方、そして拍子記号や音符などが従来の譜面とは異なっているという。小澤はこれらをひとつひとつ検証し譜面から読み取れる作曲者の創意と真意に迫ろうとする。まことに丁寧な解釈だが、表現は流麗。自然に息するように活力と生氣に溢れた表現に溢れている。

十年来ベートーヴェンの「チェロ・ソナタ」演奏でコンビを組む、レーベンスクロフトとのアンサンブルはまさに一体化した印象。同作品においてピアノが重要な役割を果たしていること、そしてチェロを際立たせる様々な工夫や仕掛けが、今回の演奏では明快に読み取れる。両者の同作品演奏にかける情熱とその類まれな解釈の精密さ、そして表現の品質さに感銘を受けた。(5月28日・東京文化会館(小))
齋藤弘美